

オオバシマムラサキの栽培技術の確立に関する試験 ：植物成長調節剤処理による矮化への取り組みにつ いて

著者	池田 充
雑誌名	鹿児島大学農学部農場技術調査報告書
巻	11
ページ	18-19
URL	http://hdl.handle.net/10232/2778

オオバシマムラサキの栽培技術の確立に関する試験

— 植物成長調節剤処理による矮化への取り組みについて —

池 田 充

(教育学部実習地)

緒 言

オオバシマムラサキの種子は、成熟すると濃厚な紫色に変化し房状に密生して着果するために、ムラサキシキブの仲間では美観が優れていると思われる。すでに良質な苗の繁殖方法については、新地氏により明らかにされた。しかし樹勢が強いため、節間長が徒長し、下葉の枯れ込みや株元からの徒長枝の発生も多くみられ、栽培方法の改良が必要と考えられる。

そこで、本実験では、このオオバシマムラサキに、樹姿の小型化などの改良を加えることで、花木としての価値を向上し得る可能性について調査した。

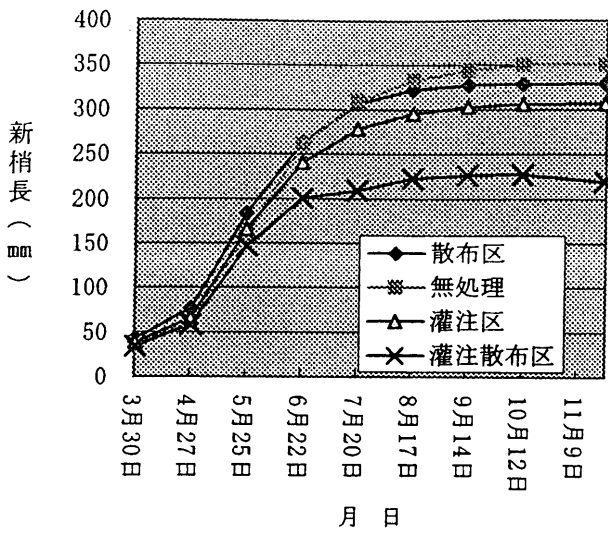
材料と方法

2000年7月に挿し木した苗を、5号プラスチック鉢に定植し、無処理区、散布区、灌注区、灌注散布区の4区を設け、各処理区を15本とした。植物成長調節剤は商品名スリトーン（一般名：アンシミドール）を使用し、散布区の希釈倍率は、5倍とし1本当たり5ccで、葉面に散布した。灌注区の希釈倍率は75倍で、1本当たり75ccを灌水した。灌注散布区においては、双方を併用した。処理間隔は1ヶ月おきに3月～10月までの8回行った。新梢長、節数、2節おきの節間長、節間茎径、各節の葉身長、葉幅について3月30日から11月23日まで2週間おきに調査した。

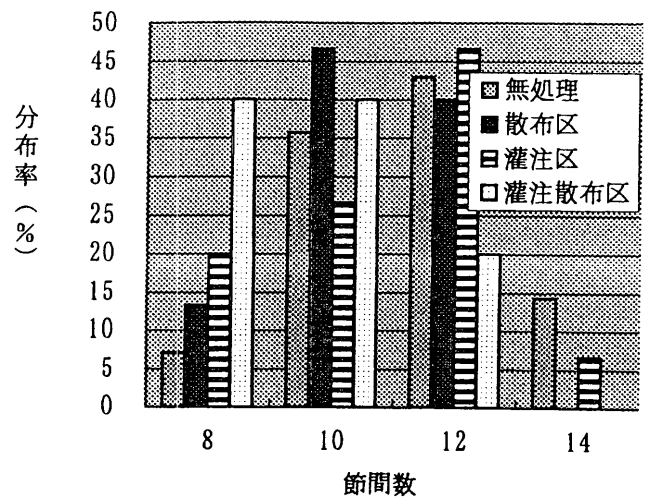
結果および考察

新梢長は5月25日までは、ほぼ同様の成長をし、散布区は8月、灌注区では6月から若干ではあるが差異が認められ、灌注散布区は6月22日を期に成長がほぼ停止し、最大で32mmの差異を記録した。このことから、この処理区が新梢長への有効性があると考えられた。無処理区に比べ散布区、灌注区、灌注散布区の順で新梢長は短くなった（第1図）。各処理区における節間数の分布では無処理区が10節と12節で全体の79%を占め、14節も14%を占めた。また散布区においては、10節に最大の47%が分布し、12節は40%であり、14節は存在せず、10節前後の占める割合が最も多かった。次に灌注区は、12節が最大の47%を占め、10節と8節は20%と27%となり、14節に7%存在したように12節を中心に分布した。一方8節が40%、10節も40%を占め、12節が20%を占めた灌注散布区は、8節と10節に80%が分布した（第2図）。平均節間数は、無処理区に比べ灌注散布区で2.0節減少した。各処理区の平均節間長は、無処理区に比べ灌注区、灌注散布区と減少したが、散布区においては差異が認められなかった。無処理区と灌注散布区の差異は7mmであった（第3図）。茎径においては、無処理区から散布区0.15mm、灌注区0.06mm、灌注散布区0.12mmの間隔であり、茎径も細くなった（第4図）。葉身長と葉幅においては、無処理区に比べいずれの区でも減少し、特に灌注散布区においては葉身長で25.2mm、葉幅で7.2mmの差異を示した（第1表）。

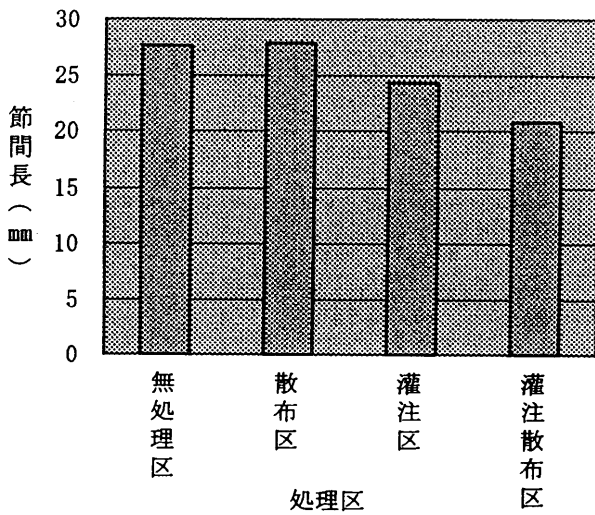
以上の結果から、本実験に使用した植物成長調整剤による効果は、散布区より灌注区が有効で、かつ双方の処理を併用することで、より一層の効果が得られることが分かった。新梢長の抑制は節間数および節間長がやや減少することによった。また茎径も細くなる傾向が見られた。ただし、灌注散布区においても、新梢長と節間長の矮化効果は十分でなく、目視での差異を認めにくかった。今後この結果を参考に、追試や処理方法を検討し、さらなる矮化への可能性を追求していきたいと思っている。



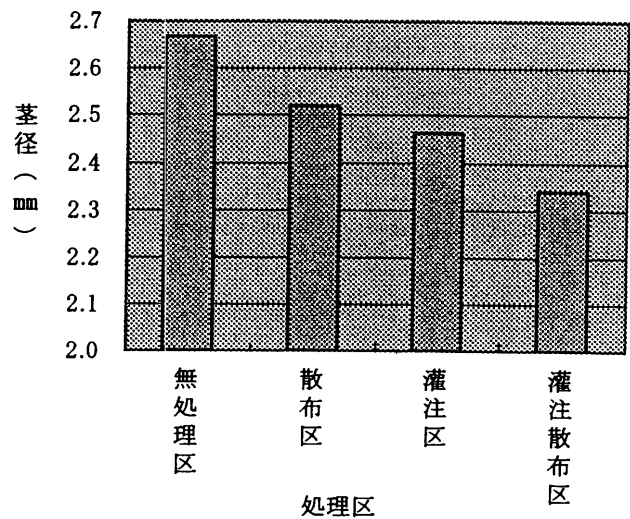
第1図 各処理における新梢長の径時的变化



第2図 各処理における節間数の分布



第3図 各処理区の平均節間長



第4図 各処理区の平均茎径

第1表 各処理区における葉身長と葉幅の平均値 (mm)

	無処理区	散布区	灌注区	灌注散布区
葉身長	92.9	73.6	73.3	67.7
葉幅	43.1	38.2	36.9	35.9